HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アニメツーリズムのこれまでとこれから 第1部:声優・福原香織さんに聞く「声のお仕事」が変える観光まちづくり（座談会録）
Author(s)	山村, 高淑//編; 板倉, 篤史//編; 福原, 香織 他
Description	研究座談会「アニメツーリズムのこれまでとこれからリモート研究会」（主催：北海道大学観光学高等研究センター）.「『声のお仕事』が変える観光まちづくり編」.2024年11月27日13時～14時20分. オンライン開催.
Issue Date	2025-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94261
Type	other
File Information	Anime tourism seminar PART01.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アニメツーリズムのこれまでとこれから
第１部:

声優・福原香織さんに聞く「声のお仕事」が変える観光まちづくり（座談会録）

福原香織
板倉篤史
山村高淑
島田邦弘
張慶在
小新井涼

山村高淑・板倉篤史 編

2025年3月
北海道大学観光学高等研究センター

cats
Center for Advanced Tourism Studies
HOKKAIDO UNIVERSITY
北海道大学 観光学高等研究センター

CTRUs Contents Tourism Research Updates
コンテンツツーリズム研究チーム

アニメツーリズムのこれまでとこれから　第１部：

声優・福原香織さんに聞く「声のお仕事」が変える観光まちづくり（座談会録）

【登壇者】

福原香織（株式会社ブライトイデア・声優）
板倉篤史（株式会社ブライトイデア・チーフマネージャー）
山村高淑（北海道大学・教授）
島田邦弘（埼玉県上里町・副町長）
張慶在　（広島大学・准教授）
小新井涼（アニメコラムニスト）

本稿は、2024 年 11 月 27 日 13 時から 14 時 20 分にかけてオンラインで開催された研究座談会「アニメツーリズムのこれまでとこれからリモート研究会」（主催：北海道大学観光学高等研究センター）における「『声のお仕事』が変える観光まちづくり編」の内容を文字化し、座談会登壇者が確認・加筆修正したうえで、座談会録として公開するものです。

1. 開催趣旨

企画者あいさつ

山村

それでは、リモート研究会を始めさせていただきます。私、北海道大学の山村と申します。福原様、板倉様、本日はお忙しい中、貴重なお時間をいただき、心から感謝申し上げます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

今回のリモート研究会ですが、板倉さんと私とで企画を立てさせていただきました。まずは主催者を代表いたしまして、私、山村より、簡単に開会のご挨拶をさせていただきます。最初だけ少し堅いご挨拶となりますが、どうぞご容赦ください。その後はリラックスした雰囲気で進めていければと思います。

今回の研究会開催に至る経緯につきまして少しお話させていただきます。2 年前の「アニ玉祭」におきまして、スペシャルゲストに福原さんをお招きし、MC を島田様と私で担当する形で「アニメの聖地サミット」を開催させていただきました。その際、福原さんから大変すばらしいお話を伺うことができました。その際に福原さんと「今回だけでは時間も足りなかったので、ぜひ北海道にて続きの研究会を開きたいですね」というお話になりまして、二年越しの企画となりましたが、10 月に板倉さんを北大にお招きしての特別ゼミ、本日はオンラインで福原さん、板倉さんをお招きしての研究会、という形で企画が実現する運びとなりました。

10 月 26 日（土）に、板倉さんに札幌までお越しいただき実施した特別ゼミでは、板倉さんを囲んで学生たちと非常に密な議論を行うことができました。そして今回、特別講師として福原さんにもお時間をいただき、様々なお話しを伺う機会を頂戴いたしました。あらためまして、福原さん、板倉さんに御礼を申し上げます。限られた時間ですが、本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

ではここで、企画・準備をご一緒いただきました板倉さんから一言ご挨拶をいただければ幸いです。

板倉

皆さま、このように 1 か月ぶりに再会できましたこと、大変嬉しく思っております。札幌では皆さまに大変お世話になり、心より感謝申し上げます。あの時は、私の立場から業界のことやエンターテインメントに関するお話をさせていただきましたが、今回は「アニメツーリズム」のこれまでや、今後の展望、といった点をテーマに議論できればと思います。

札幌での前回の研究会では、時間の都合上お話ししきれなかった部分もありましたので、今回は皆さまのご意見やお考えもお伺いできればと思っております。

今回の研究会は、山村先生とともに企画・準備を進めてまいりました。本日もどうぞよろしくお願い申し上げます。

登壇者あいさつ

山村

よろしくお願いいたします。それでは、今回、福原さんに初めてお目にかかるメンバーもおりますので、参加者からご挨拶をさせていただきたいと思います。まずは島田様、お願いいたします。

島田

先ほど山村先生からもお話がありましたが、私はもともと埼玉県庁に勤務しておりまし

た。その仕事の中で、『らき☆すた』が大好きになり、鷲宮に何度も足を運ばせていただきました。その際、福原さんにも何度かお目にかかる機会をいただきました。今回こうしてご一緒することができ、大変光栄に思っております。

また、2 年前の「アニ玉祭」では、福原さんにアニメの聖地サミットにご登壇いただきたい！という、私と山村先生との夢をかなえていただくことができました。その節は本当にありがとうございました。本日もこの場を大変楽しみにしておりました。どうぞよろしくお願いいたします。

張

初めまして、広島大学の張（ジャン）と申します。本日はこのような場に参加させていただき、大変光栄に思っております。実は、非常に緊張しておりまして、うまくお話できるか分かりません……どうぞよろしくお願いいたします。

私も『らき☆すた』の大ファンでして、大学院時代は北海道大学で山村先生のもとで学びました。現在は、勝手ながら「山村ゼミ中国四国支部の支部長」を名乗っております。

小新井

初めまして、小新井涼と申します。現在、山村ゼミの博士課程で研究をさせていただいております。もともとアニメが好きで、アニメに関するコラムを書いているのですが、2012 年に上演された『らき☆すた≒おん☆すて』というミュージカルにもご縁があり、黒井ななこ先生役を演じさせていただきました。そうした経緯があったことと、自身も埼玉県出身ということで、鷲宮の皆さまと何度かお仕事をさせていただいたことがあります。

しかし、これまで福原様が鷲宮にいらっしゃるタイミングではお目にかかる機会がなく、本日、この場で初めてお会いでき、大変光栄です。この後、直接お話を伺えることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

山村

それでは、本日はこのようなメンバーで、さまざまな質問をさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

では、質問に先立ちまして、改めまして本日の特別講師である福原香織様からご挨拶を頂戴したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

福原

あらためまして、声優の福原香織と申します。『らき☆すた』では柊つかさ役を担当させていただきました。おかげさまで、声優としての活動も来年でデビュー20 周年を迎えることとなります。

今日は少しでもお力になれることがあればと思い、いろいろと準備をしてまいりました。

どうぞよろしくお願いいたします。

山村

ありがとうございます。よろしくお願いいたします。それでは、時間も限られておりますので、早速進めてまいりたいと思います。

この後の進行ですが、前半は、福原さんから、さまざまなお話を伺っていければと思っております。その後、後半は、先ほど板倉様からもお話がありました「アニメツーリズムに期待すること」というテーマに沿って、皆さんからご意見をお伺いできればと思います。

それでは早速、福原さんからお話しを伺っていければと思います。宜しくお願いいたします！

福原

わかりました！

2. つかさ役になった経緯

山村

まずは、『らき☆すた』の柊つかさ役を担当されることになった経緯についてお伺いできればと思います。

『らき☆すた』は全員指名でキャスティングなんです

福原

経緯につきましては、特にオフレコという話ではありませんので、率直にお答えいたします。基本的にアニメのキャスティングはオーディションで決められますが、実は『らき☆すた』ではオーディションは行われていなくて、全員指名でキャスティングされています。

当時のマネージャーに「すごい作品に出演が決まりそうだから、とりあえず原作読んでおいて…！」と言われました。当時まだまだ新人だった私がこんな大きな作品にキャスティングしてもらえたのは奇跡だと思っています。

板倉

これは珍しいパターンですよね。声優さんが役を得るためには、まずオーディションを受けるのが一般的です。声優さんが自分の声で、そのキャラクターのセリフを録音したものを、

担当の監督さんや原作の先生に聞いていただいて、この人の声が一番マッチする、という方が選ばれるのが通例です。

島田

オーディションではなく、全員指名でキャスティングされたと伺い、大変驚きました。本作のあたたかみのある柔らかな世界観を最大限に活かし、「柊つかさといえば福原さん」と直感的に決められるようなキャスティングを行われた方のご判断や才能に、心から感服しております。

そこで、個人的な興味で恐縮ですが、実際にどのようなお立場の方がこのようなキャスティングを行われたのでしょうか？

福原

私は一役者ですので、正直なところ、誰が最終的に決めたのかは存じ上げません。それはおそらく、他の出演者の方々も知らないのではないかと思います。おそらくですが、プロデューサーや音響監督、原作者の先生など、さまざまなスタッフの方々が関わっていて、その中の誰かが私を見つけてくださり、そういったスタッフの方々が総合的に判断してくださったのだと思っています。ただ、具体的にどなたが最終的なジャッジをされたのかについては、正直なところ分かりません。

張

今回のような場合、オーディションと違って、役が決まってから声を創られたと思います。スタッフさんの期待に応えながら、つかさの声を創り出していく、と考えると、むしろオーディションより大変だったかもしれません。つかさの声を創り上げる過程で、特に難しかった点や工夫されたことなどがあれば、ぜひ教えていただけますでしょうか？

フリートーク 1 分間で違和感なく話せたらベース完成

福原

スタッフの皆さんも何かしら私のデモテープや過去の出演作品などを見たり聞いたりしてくださった上でキャスティングを決めてくださったと思いますので、全く私の声を知らないということはないと思います。ただ、私の場合はオーディションの有無にかかわらず、基本的にやること自体はあまり変わりません。自分がイメージするキャラクター像を自分なりに練習して現場に持っていくというスタイルです。その際、一番注意しているのは、自分の中でキャラクター像を決め込まない、作り込みすぎない、ということです。初回のアフレコで、音響監督から「もっとこう演じてほしい」とか「つかさはこういうふうにしゃべっ

てほしい」といった指示が出たとき、作り込みすぎていると柔軟に対応できなくなる可能性があります。そのため、自宅でしっかりとした基礎を作りつつも――魅力的なつかさに見えるようベースの所だけしっかり作っていく感じです――、現場で柔軟に対応できる余地を残しておくようにしています。

ちなみに、音響監督というのはアフレコの際に演出や演技指導を担当する方です。音響監督さんは他にも様々な仕事がありますが、アフレコ時には特にそうした指導者的な役割を担っています。その方が「もう少しこうしてみてほしい」と具体的に演出を伝えてくださいます。

自宅での準備についてですが、キャラクターの年齢や性格を考慮しながら、原作の漫画を読み込んでしゃべり方の背景を掴みます。また、台本があればそれを読み、自分で録音して何度も聞き返すという作業を繰り返します。そして、ある程度キャラクター像が定まってきたら、そのキャラクターで 1 分間のフリートークができるようになるまで練習します。例えば、「つかさとして美味しいものについて喋ってみよう」と自分で試してみて、それで違和感なく 1 分間話せたら、ようやくベースが完成したと判断しています。その状態で現場に挑むという形です。

山村

フリートーク 1 分間で違和感なく話せたらベース完成なのですね。さすがプロの役作りだと感銘を受けました。

ところで、「原作の漫画を読み込んでしゃべり方の背景を掴む」とのことでしたが、最初に原作を読まれたときの感想はどういったものだったんでしょう？

福原

原作を読んだ時の感想は、これをどうやってアニメ化するんだろう……？　めっちゃゆるいし、４コマだし！って思いました（笑）。

何とか爪痕を残さなければ……

山村

そんな中で、つかさ役を演じるにあたって、特に苦労された点や努力された点はあったのでしょうか？

福原

役作りに関しては、あぁいうほわほわした女の子を演じるのは得意だったので、語弊があるかも知れませんが、あまり苦労した実感はないんです。声に関しても、最初から私の声を

わかった上でキャスティングしていただいているので、声を大きく変えるような指示などはなく、私の持っていたイメージでやらせていただきました。つかさ役で「ここがどうしても演じられなくて大変だった」ということは正直ありません。

そうした役作りよりもむしろ大変だったのは、当時20歳の新人だった私が、キレッキレの素晴らしい役者さんたちやスタッフさんたちに囲まれた現場で、必死に食らいついていかなければならなかったことです。現場の雰囲気としては、「何か面白いことやってみて」という期待感がいい意味で漂っていて、「みんなの出してくるものを楽しみにしているよ」という感じのスタッフの皆さんでした。その中で、「何とか爪痕を残さなければ……」「ここで結果を出さないと声優人生が終わるかも……」というプレッシャーがあり、大きなチャンスを掴むために必死に挑戦していました。その意味では、役作りよりも現場そのものが大変で、それが苦労した点だったと言えるかと思います。

山村

先ほど音響監督さんの指導についてお話がありましたが、原作者の美水先生から「こうしてほしい」というような具体的な指導やアドバイスはあったのでしょうか？

福原

美水先生についてですが、基本的に原作者の先生が毎回アフレコ現場にいらっしゃるということはありません。初めてお会いしたのがいつだったかははっきり覚えていないのですが、アフレコ初回のときにはいらっしゃいませんでした。何かのきっかけでお会いした際に、「すごくかわいいです。ありがとうございます。そのままでお願いします」というようなお言葉をいただいた記憶があります。ご存じの方も多いと思いますが、美水先生はとても腰が低く、優しく、本当に素敵な方です。

ご質問にお答えするとすれば、基本的につかさのキャラ付けはアフレコ現場でスタッフの皆さんと一緒に作り上げていった形です。原作者の先生からの直接的なアドバイスは特にありませんでした。

3. 当時の苦労

必死すぎて当時の記憶はあまりありません

福原

先ほど、キレッキレのスタッフさんのお話しを少ししましたけど、『らき☆すた』のスタ

ッフさんは『涼宮ハルヒの憂鬱』に関わっていた方も多く、キレッキレのイケイケ！　「このまま『らき☆すた』も大ヒットさせるぞ」っていう熱量がものすごかったんです。当時新人だった私はアフレコするだけでもいっぱいいっぱいでしたが、雑誌の取材撮影、アニメ本編のエンディング実写映像撮影＠北海道、『もってけ！セーラーふく』などキャラソンのレコーディング、武道館ライブ、などなど次々に大きなお仕事がやってきたので、とにかく体当たりで挑んでいました。まわりからは「『らき☆すた』大ヒットしててすごいね！」とか、「『もってけ！セーラーふく』オリコン２位おめでとう！」とか言われましたが、台風の目にいる私達はそれどころではなかったというか（笑）。みんなそれぞれ必死に頑張っていました。必死すぎて当時の記憶はあまりありません（笑）。

島田

本当に怒涛の日々を過ごされていたんですね。「これをやれば次はこれ」といった具合に、大きなうねりの中で、次々と多くのお仕事をされていたのだろうと想像しています。最後におっしゃった「必死すぎて当時の記憶はあまりありません」という一言、まさにそれが当時の本音なのではないかと感じました。

そのような忙しい日々の中で、声を使うお仕事ということで、特に声のコンディションや体調管理については、より一層気を遣われたのではないかと思います。私も飲みすぎた翌朝の会議はボロボロですので（笑）。そうした健康面で心がけていたことがあればぜひ教えていただきたいです。

福原

はい。よく「声優さんって常にマスクをしているんでしょう」とか、「家に加湿器を 5 台くらい置いているんでしょう」といったイメージを持たれることがあると思います。確かにそういう方もいらっしゃるかもしれませんが、私の経験では、そこまで過保護にしている方は正直あまり見たことがありません。

もちろん人によるとは思いますが、大先輩方の中には、お酒やタバコを嗜んだ上で翌日アフレコに臨んでも全然問題なくばっちりこなされるような方もいらっしゃいます。おそらく訓練を積んでいるからこそ、体が強い方が多いのではないかなと思っています。

私自身も特別なケアをしていたわけではなく、例えば「ネギを首に巻く」といったことも一切していません（笑）。本当に普通の生活を心がけていました。重めの現場の前の日にはお酒を控える程度で、あとは特に変わったことはしていませんでした。

体力作りについても、当時は若さがあったからこそ乗り越えられた部分が大きいと思います。今だったらこなせないようなスケジュールも、当時は「夢の階段を登っている途中」という気持ちがあり、忙しくても辛くても、アドレナリンがすごく出ていて、ある意味で痛みや疲れを感じないような状態でした。それくらい毎日が充実していて、楽しくて仕方がなかったんです。寝不足ですら楽しいと感じるような、不思議なゾーンに入っていたと思いま

す。

ただ当時は、ネットの掲示板的なのもかなり盛り上がっていた時代なので、誹謗中傷もすごい時期で、見たくなくてもふと目に入る時があって。容姿への悪口ももちろんあったので、今当時の写真を見ると、全然太ってないどころかめちゃめちゃ細いのに「もっとダイエットしなきゃ私はダメなんだ！」みたいな感覚になっていましたね。そういった事は大変ではありました。

とにかく無茶ぶりがすごかったです

小新井

アニメエンディングの実写映像の北海道ロケは、数あるアニメ作品や声優さんの幅広い活動の中でも、『らき☆すた』ならではのユニークな体験だったのではないかと思います。そこで、観光との関連性も含め、当時の北海道での撮影や、北海道で過ごした時間の中で特に思い出に残っていることがあれば、ぜひお聞かせいただけますでしょうか？

福原

とにかく無茶ぶりがすごかった事です（笑）！　あの北海道ロケ、2 泊 3 日で行ったのですが――観光はしていません――、台本がないんです。本当に「むちゃぶり」の連続という感じのロケでした。おそらくスタッフさんは事前にロケハンをされていたと思いますが、私たちには台本などは一切配られておらず、「こんな感じの映像を撮ろうかな」という程度のイメージだけで進められました。そんなイメージのみで、北海道をロケバスで走りながら、突然面白そうな場所を見つけたり、アイデアを思いついたりしたら、バスを停めて撮影を開始する、というスタイルでした。

普通の事務所であれば断りそうな内容だと思うのですが（笑）、たとえば、「ここに広いジャガイモ畑があるから、シャボン玉でも吹いてみて」とか、「この道が長いから白石さんを降ろしてバスが行っちゃう、追いかけてみて」といった具合でした。これらもすべて台本なしで進行しており、どういう画面になるのか全く分からない中で、ひたすら撮影を続けました。

ほかにも、突然駐車場で降ろされて私はチアガールの衣装を着て踊るよう言われたり。なお、何を踊るのかも私は知らない（笑）。今思えばよく事務所から NG が出なかったなと感じます。当時の白石さんや今野さん、そして私のマネージャーが、非常に広い心で対応してくださったおかげで何とか乗り切れました。

スタッフさんの「悪ふざけ」が過ぎたようにも見えましたが、大人になった今振り返ると、それも計算された作戦だったのだと思います。新人に多少の無茶をさせることで、面白い、かわいい映像が撮れ、それが話題となり、作品や個人のファン獲得にもつながる、という意

図があったのではないかと感じます。実際、毎週放送の度に、なんなんだ？このエンディングは？！ってなってましたよね。本当にすごいスタッフさん達だったと思います。

今になってみると、考え尽くされたプロモーションだったんだなと思います。

カラオケボックスでこなたの茶々に惑わされるつかさの雰囲気を……

張

私は本編のエンディングについてお伺いしたいです。個人的には『らき☆すた』のエンディングといえば、前半のカラオケボックスのシーンが非常に印象的で、特にキャラクターと歌が非常にマッチしていると感じました。例えば、柊つかさの『バレンタイン・キッス』などは特に良かったです。そこで質問なのですが、これらの曲は、声優の皆さんが選ばれたのでしょうか？　それともスタッフの方々が選定されたのでしょうか？　その点についてお聞かせいただければと思います。

福原

はい、選曲は全部スタッフさんです。私達キャストは 1 曲も選んだものはないです。レコーディングも「女子高生のカラオケ感」っていうのを出したいので、一発録りで録ってる状況なんですね。

『バレンタイン・キッス』は、私と平野綾ちゃんが――綾（こなた）は茶々入れみたいな感じで、すごくうるさくしてるんですけど――あれは一緒に録ったと見せかけて、実はスケジュールの都合で、先に平野綾ちゃんのにぎやかな合いの手のほうだけ先に収録されていたんです。その合いの手だけある状況で、私が歌入れをしなきゃいけなかったんです。なので、こなたの茶々に惑わされて、おどおどしたり音程を外したりするつかさの雰囲気をあえて意図的に入れてます（笑）。

張

順番が逆だったんですね。

福原

そうなんですよ。一緒に録ってるところもあって。あの時は綾ちゃんだけ一緒に録れなかったのかな。全然オフレコの話じゃないから普通に言っちゃうんですけど、『ドラえもん』の歌だったかな、加藤英美里ちゃんと遠藤綾さんとワチャワチャしながら 3 人で一緒に歌って録ったものもありますし。個人が歌う曲の場合は、誰かが歌ってるときは他のブースで待ってる、っていう感じで録りましたね。

加藤英美里ちゃんのソロ曲は、歌っているときにキーをどんどん下げられるじゃないで

すか（笑)。あれなんかは、スタッフさんはもう爆笑しながら見ていて、英美里はテストだと思って歌ったら、はいOKです、みたいな。普通だったらありえないようなレコーディング現場でした（笑)。

フリーランスになって地域に対する意識が変わりました

山村

次の3番目の質問にも関わる部分になるのですが、2007年の終わり頃から鷲宮町でのイベントが次々と開催されていったかと思います。福原さんが最初に鷲宮にいらっしゃったのは、2007年12月2日に開催されたイベント「『らき☆すた』のブランチ＆公式参拝 in 鷲宮」（企画：らっきー☆ぱらだいす、主催：鷲宮町商工会、鷲宮町商工会青年部）ですよね。

福原

そうです、そうです。公式参拝のときです。

山村

その際の――初めて鷲宮を訪れた際の――感想をお伺いしたいです。また、その後何度も鷲宮に足を運ばれる中で、鷲宮に対する印象がどのように変化していったのかについても、ぜひお聞かせいただければと思います。

福原

そうですね、最初に鷲宮に行った公式参拝のときや、その次に行った住民票交付（2008年4月）のときは、正直、あまり鷲宮のことを知らないまま行ってました。「聖地」と呼ばれる場所に行くという感じで、他のイベントに出演するときと同じようなスタンスだったんです。あくまでも一出演者としてイベントを盛り上げたい！という感覚です。

公式参拝のときなんかは、神社に数千人のお客さんがいて――当時 Yahoo!のトップニュースにもなっていましたね――、「何も見えない！　人しかいない！　鳥居ってどこにあるの？」みたいな感じで、現場の状況が全然分からなくて、本当に「台風の目」の中にいる感じでした。

聖地としての鷲宮の盛り上がりについての意識が変わったのは、2016年くらいかな、自分がフリーランスになった頃です。そのとき、鷲宮の商工会のスタッフさんたちと直接やり取りするようになって、アニメ関係者だけじゃなくて、地域の人たちも一生懸命『らき☆すた』を盛り上げてくれたり、知ろうとしてくれたりしていたんだなぁと、肌で感じたんです。

山村

なるほど。フリーランスになられて、直接地域の方とやり取りされたのが、意識が変わる大きなきっかけだったんですね。

福原

そうですね。それ以前も、マネージャーを通じて柊姉妹生誕祭のようなイベントに、毎年出演させてもらったりしていたんですが、やっぱりマネージャーを通すとニュアンスが少し変わってきちゃうことってありますよね。仕方のない事ですし、マネージャーが悪いという事では全くありませんが、間にワンクッション挟まることで、直接感じ取れない部分がどうしても出てくるんです。それまで私は依頼内容や台本を文面で見るだけだったので、どんな思いで依頼されているのか、地域がどういう状況だったのか、正直よく分かっていなかったんです。

山村

当時の商工会の皆さんの熱量、すごかったですもんね。

福原

そうですよね。だからもっと早くに気づいてあげられたらよかったなって思うところはありますね。

4. 鷲宮町、そして久喜市への思い入れ

少しでも作品やファンのみなさんに「ありがとう」を返せるのであれば……

山村

先ほど少し触れられていましたが、毎年のように 7 月の柊姉妹の誕生日に、福原さんご自身、鷲宮に行かれていらっしゃいますよね。その辺りについてお伺いできればと思います。

福原

『らき☆すた』に出会えていなかったら今の私はいないですし、とっくに声優としてのキャリアも終わっていたと思います。私をたくさんの方に知っていただき、たくさんの経験をさせていただいた作品ですので、恩返し、というとおこがましいですが、私が鷲宮でイベントをする事で少しでも作品やファンのみなさんにありがとう、を返せるのであれば、行き続

けたいなと思っています。いまは「久喜市くき親善大使」も担当しているので、鷲宮含めた久喜市全体への貢献ももっと出来たらいいなぁと思っています。

島田

『らき☆すた』の声優さんとして地域振興に関わっていただく中で、地域自体にも愛情を持っていただいて、親善大使にまでなって下さったということで、本当に嬉しいです。

私は、もともと県庁の職員として、『らき☆すた』のまちおこしを微力ながら応援する形で、鷲宮と関わり始めました。でも、何度も何度も鷲宮に足を運ぶうちに、すっかりその魅力にはまってしまいまして。

今では県を辞めて、上里町という小さな町の副町長を務めていますが、県庁職員だった時には気がつくと鷲宮でイベントの司会をやらせていただいたりしていて、本当に「なんだろうこの町の、沼みたいな魅力は」と感じるようになりました。

鷲宮の魅力については、福原さんも久喜の親善大使をされたり、何度も鷲宮のイベントに出ていただいたりする中で、感じられていると思います。そこでお伺いしたいのですが、福原さんにとっての鷲宮の一番の魅力、「ここは変わらないで欲しい！」と思う点はどこにありますか？

福原

一番は、のどかなところ。昔からの地域の人がつくってきた空気感や温かさがある気がします。その一方で最近は新しい戸建て住宅が増えたり、若いファミリーが住み始めたりしているのも目にするんですが、そういう変化も個人的には嬉しいですね。のどかさを求めて、リモートワークを理由に引っ越してきた人もいるのかなとか、事情は分かりませんが、鷲宮にはそういった新しい人たちを惹きつける魅力もあるんだろうなと思います。

でも、のどかだけど、一通りあるじゃないですか。コンビニもファミレスもショッピングセンターも何でも揃っている、なのにあののどかさ、っていうのは、たぶんちょうどいい地理的な位置なんでしょうね。東京にも近い、でも地方に行き過ぎない、という。あの感じが良さなんだと思いますね。

島田

ちなみに私が仕事してる上里町も、のどかさでは負けませんので、機会があったら是非来てください。

福原

呼んでください、是非！

今までと変わらず、定期的に埼玉、鷲宮に関わり続けること

小新井

先ほど鷲宮での初めてのイベントでのご感想を伺ったのですが、当時は、鷲宮という地域とこんなに長いお付き合いになるとは、夢にも思われていなかったのではないかと思います。そのような中で、ついに「久喜市くき親善大使」という役職にもご就任され、地元のお店などでお写真を撮られたりと、素晴らしいご活躍をされていると伺っています。そこで、親善大使として、今後「こんなことをやってみたい！」というようなアイデアがありましたら、ぜひお聞かせいただければと思います。

福原

「親善大使すごいね！」とかよく言われるんですが、親善大使になったからといってあまり変わらないというか。元々、定期的に鷲宮にも来てましたし、地域の皆さんとも繋がりがあったので、何かが変わったということはないですね。多分、私の親善大使としての役目は、あれもこれも、っていうよりも、今までと変わらず、定期的に埼玉、鷲宮に関わり続けることだと思ってます。そこで現地の方や作品ファンの方と楽しい時間が過ごせたらいいなと。新たに何かするというよりも、今あるものを大事に、細くてもいいから長く続けられたらと思ってます。

小新井

ありがとうございます。いろんな地域に親善大使の方がいらっしゃると思うのですが、まさに「今あるものを大事に長く続ける」ことが実は一番難しい点だと思います。そんな中で、福原さんのお考えやお取り組みは本当に素晴らしいなと感じましたし、福原さんと長くお付き合いが続いている鷲宮、そして久喜市は、注目すべき事例だな、と改めて思いました。

好きなのは「場所」というより「人」

張

私も鷲宮の魅力について伺いたいと思います。もし福原さん的に「鷲宮のここが一番！」という、一押しの場所があれば、ぜひ教えていただきたいです。

福原

私が好きなのは、「場所」というより、「人」なんですよ。なんて言うんでしょうね、地域で出会う方々や、鷲宮に来てくれるファンの人たちが本当に好きなんです。みんな温かくて。『らき☆すた』が好きとか、鷲宮が好きとか、思いが共通だからこそ、余計にそう感じるの

かもしれないですけど。もちろん、神社をはじめとして見るべきところもたくさんありますけど、やっぱり私は「人」が好きですね。

山村

先ほど、「恩返し」という言葉が福原さんからありましたが、すごく素敵な言葉だなと思いました。この「恩返し」という思いを持つようになったきっかけというのは、やはり先ほどのお話にあったように、フリーランスになられて地域の方と直接やり取りをするようになったことが大きいのでしょうか？

福原

そうですね。特にこれといった出来事がきっかけになったというのではなくて、フリーランスになったときに、自然な流れで、商工会の方々と直接やりとりをするようになって。ただ、商工会の方々はプロのイベンターではないですし、声優業界だったり芸能界だったりを熟知している方々でもないですよね。そういう方々がイベントを回してるので、どうしてもやり取りがスムーズにいかないときもあったりしました。そんな中でも、地域の方々が、何とか成功させたいという思いで、試行錯誤をしながらイベントを続けてくださってる姿が見えて。それで何か協力できることがあればやらせていただきたいな、と思うようになったんですね。

とにかく、鷲宮で出会った地域の人や、鷲宮に来てくれるファンの人が好きだから。みんな温かい。それが大きいですね。

山村

おそらくそこには、「恩返し」というお気持ちの他にも、地域と福原さんとの「相性の良さ」、といったような特別な何かがあるようにも感じています。そのあたりについては如何でしょうか？

福原

「相性の良さ」については――相性の良さかわからないんですが――自分で言うのもなんですけど、私けっこう頑張り屋さんなんですね（笑）。だから他の事務所が、例えば「オフィシャル感がないイベントだし、ちょっと大変そうだし、断ろうか」って言ってしまいそうな案件でも、私の場合「どのように工夫すれば、私が問題なく出演できるのか？　円滑にイベントが進むのか？」っていうふうなことをきちんとやり取りするタイプなんです。そういう性格もあって、ここまで続いたのかなとも思います。

5. アニメツーリズム長寿事例としての鷲宮

好きなのは「場所」というより「人」

山村

鷲宮はアニメを活用したまちおこしの長寿事例として、全国的にも非常に有名な場所になっています。鷲宮が今も注目され続けていることについて、福原さんのご感想をお聞かせいただければと思います。

福原

ある程度作品がヒットして、聖地が盛り上がって、というのは最近よく目にしますが、聖地がこれだけ長い間盛り上がっているのは本当に珍しいと思います。鷲宮の商工会のみなさん、ファンのみなさんが、なんとかこの灯を絶やさないように…！と一生懸命やってくださった結果だと思います。地域の方も最初はいきなり鷲宮にたくさんオタクの方やコスプレイヤーが訪れて戸惑いもあったそうですが、ありがたい事にアニメ文化を受け入れていただき、商店街のおじいちゃんおばあちゃんもお店に『らき☆すた』のポスターを貼ってくれてたりします。そんなほっこりする景色やエピソードが他にも沢山ありますよ！

島田

私も仕事上、いろいろな人に聞かれます。「アニメを使ってまちを元気にしたい」、あるいは、「たまたまアニメの舞台になったので、これから鷲宮みたいに盛り上げていきたい」、できれば「末永く続くまちおこしの事例にしたい」という感じです。

そこで是非教えていただきたいのですが、実際に福原さんが何度も鷲宮に関わっていただいた中で、「こういうことが他の地域でもできたら長続きするんじゃないかな」や、「こんな人が地域にいたらうまくいくんじゃないか」といったような、他の地域も参考にできるポイントはありますでしょうか？

地域の方々の器の大きさ、ですよね

福原

はい。やっぱりブームの当初、地域の人たちもびっくりしたとおっしゃっていました。「突然アニメファンがいっぱい町に来た」とか、「制服を着た人（レイヤーさん）がたくさんいる」とか、そういう状況にびっくりされたと聞いています。私が地域の人だったとしても、きっと驚くと思います。

でも、そんな状況の中でも地域の皆さんが本当にいろいろと協力してくださったんです

よね。例えば、おじいちゃん、おばあちゃんが多い商店街なのに『らき☆すた』のスタンプラリーを開催したりして。それだって商店街の皆さんが『らき☆すた』を知ってくれて、「やっていいよ」という同意がないとできないことじゃないですか。作品を受け入れてくださったんですよね。その他にも、地域のお弁当屋さんが、『らき☆すた』作中に出てくるお弁当と同じようなお弁当を販売してくださったり、地域限定販売のオリジナルのソースを作ってくださったり。そういう取り組みがあると、作品のファンの方はそこでお金を使っていってくれますし、また商店街に行きたいと思うんですよね。

「アニメなんて知らない」とか「若い人たちがいっぱい来るのは嫌だ」といったスタンスではなくて、むしろ『らき☆すた』を知ろうとしてくれて、オタク文化を受け入れてくださったんですよね。地域の方々の器の大きさ、ですよね。

1 年くらい前だったかな。郵便局につかさ像が出来上がったときに、郵便局の前でイベントをさせていただいたんです。そのときにすごいなと思ったのが、地域の方なのですが、お母さんと小学校低学年くらいの女の子が前を通りかかって、「今日何やってるんだろう？」って女の子が聞いたら、お母さんが「ああ、『らき☆すた』だよ」、「そっかー」って（笑）。普通のこととして会話していたんです。それを聞いて、なかなかないよな、こういうこと、とびっくりしてしまって。普通のお母さんだったら、「知らない男の人がたくさんいるけど、何やってるんだろう？」って言ってしまいそうじゃないですか。でもその親子の会話からは、『らき☆すた』は、もう本当に生活の一部になっているんだなって思えて。個人的にはすごく嬉しかったんです。

地域の人たちが『らき☆すた』やそのファン文化を受け入れてくださって、「楽しいことをしてみよう」と協力してくれた。それが、まちおこしの成功につながった大きな要因だと感じています。

島田

本当に同感です。私も初めて鷲宮を訪れたとき、小さな女の子を連れたお母さんが、痛車を指さして「まあ、綺麗な車だね！」と話しているのを見たんです。

福原

わ、最高！　それですよね。それ、それ。

島田

それって本当にすごいことで、場合によっては「見るんじゃありません！」とかいった反応になるところを、そうならないのが鷲宮の素晴らしさですよね。

福原

そうそう！

長年続けているとどうしても地域の方の退職や異動が出てきてしまう……

小新井

地域とお仕事をする中で、普段お仕事をしている環境とはちょっと感覚が違うなと感じる部分や、「ここがもう少しこうなったらいいのに」と声優さんの立場だからこそ感じる地域側の課題や改善したほうが良いと感じる点などがあれば教えていただきたいです。

また、逆に「ここがこうだから鷲宮さんとはずっとお仕事をしたい」と思えたポイントがあれば、ぜひ教えていただきたいです。おそらくこの点は、これからアニメを活用して地域を盛り上げたいと考える他の地域の方々にとって、一番知りたい点なのではないかと思います。

福原

長年続けていると、どうしても市役所の方や商工会の方の退職や異動が出てきてしまうんですね。イベント会社が間に入っていれば、会社としてイベントをやるのが目標なので、どんどんイベントを続けていくことができると思うんですけど、市役所の方や商工会の方が担当を変わられてしまうと、関係性がその都度リセットされてしまうような感じがあるんですよね。もちろん引き継ぎはしてくださっているんですけど、やっぱりみんなプロのイベンターではないし、もともとオタクではない方々がイベントの企画・運営をしていることも多いので、どうしてもうまくいかない点が出てくるんですよね。なので、退職や異動があっても乗り越えられるような仕組みづくりがあればいいなと毎回思っています。正直、今は「この火を絶やさないぞ」という気合と根性でやっている部分が大きいのではないかと思います。

例えば、市や県が予算を出して、イベント会社に企画運営を任せてくれたら、私たちもオファーを受けやすくなるし、双方もっと楽になるんじゃないかなと思うこともあります。ただ、鷲宮の場合、地域の人たちが運営している良い意味での「ちょっとしたグダグダ感」が、ファンにとって心地よくて、その雰囲気を楽しみに来てくれている方もたくさんいるので、そこをどうバランスを取るかが難しいですよね。

でもやっぱり、大変そうなんですよね。地域の人たちが本当に一生懸命で、ボランティアの方々もたくさん協力してくださっていますが、いずれは、もう少し外部の協力も必要になってくるようにも思います。

島田

私の経験でも、異動があったとき、仕事自体の引継ぎはできるんです。でも、作品への向き合い方や、人とのコミュニケーションのあり方は、どうしてもうまく引き継げないんですよね。そうした「思い」というものをうまく引き継いでいくことができれば、という点が私にとっても大きな課題です。

アニメツーリズムの持続可能性を考えたとき、本当に大事なエレメントをひとつあげるとすれば、「キーになる人」だと思います。そして「キーになる人」は私のような行政の人間じゃなくて、やっぱりその地域に住んでる方。例えば鷲宮の例ですと、商工会の皆さんもそうでしたし、地元の商店街の皆さんの中にも熱い思いを持っている方がたくさんいらっしゃいました。今まで『らき☆すた』を見たことが無い人がいれば、「こんなに良い作品だから」と見てもらうように勧める方がいらっしゃる。1 人でも 2 人でも、その地域で愛を持って情熱を持って作品の魅力を語り続ける人がいる、これが持続させるうえでの最大のポイントになると思っています。そういう人が地域にいることが多分、一番大事なことなんでしょうね。

熱量を保つために、自分でやり取りを続けていたんです

山村

私自身は、鷲宮が長寿事例になっている大きな理由のひとつが、地域の皆さんと、福原さんはじめクリエイター・製作者の皆さんが良好な関係性を構築していることにあると感じています。そこでお伺いしたいのですが、声優さんというお立場で、特に地域の皆さんと息の長い良好な関係性を築くきっかけになった出来事、ターニングポイントのようなものはあったと感じていらっしゃいますか？　また、良好な関係を築くうえで、何かコツのようなものがあるとお感じになりますか？　そのために福原さんが心がけられていること、実践されていること等はありますか？

福原

最初は「いちスタッフ」と「いち役者」という感じで、例えばイベントに行ってご挨拶して出演して帰る、というよくある形だったんです。でも、私がフリーになってから、そしてそのあと今の事務所に所属するようになった後も、鷲宮の案件だけは「これだけは自分でやり取りさせてください」とお願いしていました。事務所も「いいですよ」と言ってくれて、鷲宮案件だけは、自分でパソコンを使ってやり取りをしていたんですよ。

というのも、フリーになって鷲宮の方々と直接やり取りをする中で、地域の方々がどれだけ努力されているのか、どんな苦労をされているのかがすごく見えてきたんです。そうした中で、もし、その案件を再びマネージャーに戻してしまうと、今まで積み上げてきたものがふわっと消えてしまうんじゃないか、熱量が変わってしまうんじゃないか、と不安に思ったんです。最悪の場合、イベントが衰退してしまうんじゃないかと。だから、その熱量を保つために、自分でやり取りを続けていたんです。

「次はこういうことができないかな」とか、「コロナ禍でイベントができないなら配信ならできるよね」とか、直接やり取りしながら、意見交換できる場を自分で作りました。そう

することで、コロナ禍でお客さんを入れてのイベントはできなくても、代わりにまちあるき企画『らっきー☆うぉーく「ブラ☆カオリン」』なんて映像を撮って配信したりできたんですね。そのとき、初めてファンに愛されていたラーメン屋さん（今は閉店してしまったんですけど）に行ったりして、地域の温かさを改めて感じたりもしました。

ただ、もちろん簡単な道のりではありませんでした。最初の頃は、やり取りが大変だなと思うこともあったし、意見がぶつかったことも正直ありました。「そういう言い方はしないでください」とか「そういうやり方はしないでください」とか、商工会の方々に率直に意見を伝えたこともあります。タレントがそういうことを言うのはリスキーだと思いますし、嫌な感じに思われて、もう使ってもらえないこともあるかも知れません。でも、私は「この人たちと一緒ならもっと良いものを作れる」と信じていたので、できることはできる、ダメなことはダメ、とはっきり意思表示するようにしていました。それが結果的に良い関係を築くきっかけになって、やり取りもどんどん円滑になっていったんです。

今年は私が久喜まで行ってスタッフさんたちとプライベートで飲み会をするくらいまで仲良くなりました（笑）。タレント側がここまで地域の人に踏み込むのも珍しいと思います。

今は子育てで忙しく、事務所を通して鷲宮案件も進めてもらっていますが、マネージャーも鷲宮案件のゆるさをわかってくれて進めてくれているのでありがたいです。

なので、アドバイスになるか分からないんですが、たぶん地域の商工会の方々から声優と仲良くなろうとしても、普通はなかなか難しいと思うんです。逆に、声優や事務所のほうがもう少し心を開いて歩み寄れば、成功する可能性が高まるかもしれません……でも、そのバランスはすごく難しいですよね。

お互いに対話を通して良い人間関係を作ってきたなと

山村

すごくいいヒントをいただきました。ありがとうございます。もう一点、ファンの皆さんとの良好な関係性――ファンの皆さんと声優さんとの良い関係――を持続させていくうえで重要なポイントって何だと思われますか？　この点で福原さんが何か心がけられてることはありますか？

福原

これもさっきの地域の皆さんとの関係性の話と似ているんですけど、今応援してくれているファンの方たちって、付き合いが長い方が多いんですよね。それもあって、常識の範囲内ですがとてもオープンな関係性なんです。なので、例えば、ファンの方が「これ、良くないんじゃないかな」と思ったことがあれば、ちゃんとそう言ってくれるんです。「もっとこうしたほうがいいんじゃない？」とか、全然喧嘩を売っているわけでもなく、炎上させたい

とかでもなく、本当に、普通に会話の延長としてアドバイスをくれるんですよ。私も「そっか、そっか、分かった」と素直に受け取れる関係で、お互いに対話を通して良い人間関係を作ってきたなと思います。それも長い時間をかけて築いてきたものですね。

なんでそうなったんだろうって考えると、やっぱり個人の配信とかをやるようになったのが大きいのかなと思います。10 年くらい前に SHOWROOM みたいなサービスができ始めて。今でこそそういう仕組みは当たり前なんですけど、当時は声優が個人で配信をやってファンと直接やり取りする機会はほとんどなかったんですよ。だから、当時、SHOWROOM を始めたときも、「福原がまた変なことをやり始めた」みたいにネットでいろいろ言われたりしましたけど（笑)。それに負けずに続けてみたら、定期的に長時間ファンと接することでお互いを知れるようになって、自然とこういう関係が築けるようになったのかなと思います。

山村

良い関係を生むうえで、直接対話することが如何に大切か、良くわかるお話しですね……非常に参考になります。ありがとうございます。

6. アニメツーリズムの利点と課題

課題点は継続することの難しさ……

山村

おそらく今回の研究会の総括的な質問になるかと思うのですが、「アニメでまちおこし」「アニメツーリズム」の良いところと、課題点について、福原さんはどのように感じていらっしゃるでしょうか？

福原

良いところは、遠方の方にもその地域の名前を知ってもらえたり、遊びにきてもらえたりするところ。鷲宮×『らき☆すた』のコラボグッズなどを定期的に販売することで、地域に利益が生まれます。ファンのみなさんも「自分たちが作品を支えなきゃ！」という使命感もあり、ありがたい事に、地域である程度のお金を使って帰られます。

課題点は継続することの難しさです。商工会や役所の方が異動になったり、退職されたり、商店街のお店が閉店になってしまったり。付き合いのある方がいなくなると、やり取りするのがなかなか難しくなってしまうことですよね。

鷲宮で感じた課題は、先ほども触れましたが、何とか灯を絶やさないように……と、地域の皆さんが気合と根性で頑張ってくれている部分がかなり大きい点です。ボランティアの方々の力にも本当に多く頼っている状況です。

鷲宮には来てくれるファンがたくさんいるのに、それでも運営が苦しいという感じのところがあって、そこを何とかしないといけないなと感じています。「仕組み化」っていうとちょっと違うかもしれませんが、より強い企画・運営チーム作りをしないと、さっきお話ししたような退職や異動の影響で、本当に厳しい状況が来てしまう気がしています。

私も一役者として、「どうしたらいいんだろう」と考えることが多いですね。何か良い方法があればいいなといつも思っています。繰り返しになるのですが、もっときちんとした予算があって、ちゃんとしたイベンターさんが間に入っていれば、イベントづくりやキャスティング、当日の会場運営も、もっと上手くまわせるのになーと思うこともあります。ただ、反面、地元の方が手作りでイベントをやっているからこそ、あのアットホームさが出せるんだよなーとも思いますし、難しいところですね。

山村

おっしゃるとおり、運営上、本当に大変な面が多いと思うのですが、あの手作り感、アットホーム感が魅力なんですよね。

みなさんとてもマナーが良いですよね

福原

そう、鷲宮イベントって驚くほどアットホームなんですよね。話がそれるのですが、それでもトラブルなく成り立っているのは、間違いなくファンのみなさんの民度の高さだと思います。みなさんとてもマナーが良いですよね。

島田

今、おっしゃられた「間違いなくファンの皆さんの民度の高さだと思います」という一言、本当に心を打たれました。おっしゃる通り、地域側のスタッフの皆さんの熱意ももちろん素晴らしいのですが、そこに集まるファンの皆さん、特にボランティアとして活動されている方々って本当にすごいですよね。

福原

すごいですよね。

島田

以前、鷲宮で福原さんにご登壇いただいたイベントで、その時、私が舞台 MC をやらせていただいたんですが、すごい数のお客さんで。来場者の皆さんが舞台に押し寄せないようにする整理係をファンの皆さんがボランティアでやられているんですね。舞台に背中を向けて。福原さんの大ファンなのに一度も舞台を見ずに背中を向けて、「ここから先に出ないでください、押さないでください」と。イベントが終わった後、そうしたボランティアの方に話を聞くと、「声優さんたちが安全に舞台をしていただければ、僕も嬉しいんです」と。私、感動で泣きそうになりました。

板倉

プロダクションのスタッフとしてもそれは嬉しいことですよね。

島田

まさに「民度が高い」と感じたんですよね。声優さんも大好きだし、作品も大好きだし、そして何よりこの地域、鷲宮が大好きだっていう思いがファンの皆さんからすごく伝わってくるんですよね。

山村

先ほど福原さんがおっしゃった「アットホームさ」っていうのも、まさにその辺から来るのかもしれないですよね。単にイベンターさんに外注したら、スムーズな運営にはなると思いますが、そうした熱量にはならないですよね。

板倉

私も鷲宮で、イベント開始前に会場に入らせてもらって、スタッフの皆さんが準備している姿を拝見しているんですが、皆さん、本当に楽しそうというか。嬉々として動いている。やらされている感が無いんですね。「イベントを創りたい！」という思いの強さを感じました。「来年もまたやりたいよね」という感じで毎回終わっているように思います。

タレントとファン、作品とファンは鏡

島田

何で皆さんこんなに民度が高くて、マナーがいいのかなって考えたときに、もしかしたら作品自体がすごく優しい作品だからこそ、そういう雰囲気がファンにも影響しているのかなと思ったりするんですが、福原さんはどう思われますか？

福原

なんか、「タレントとファン、作品とファンは鏡みたいだ」っていう話を聞いたことがあるんですよ。

『らき☆すた』も、あのほわほわした 4 コマ漫画の空気感や、何も争いの起きない優しい世界観がそのままファンにも反映されているように感じます。ただ、2007 年の当初からみんながみんなそうだったかというと、多分そうではなかったと思います。あの頃はまだネットの掲示板的なものが全盛期の時代で、中には少し激しいタイプの方もいたかもしれません。

でも、全体的に周りの空気が温かかったから、そういう方たちも時間をかけて「訓練されたオタク」に仕上がっているというか（笑）。

いまは多分、自分たちが何かヘマをしてしまったら、「これまで何とか繋いできた鷲宮界隈が悪い評判になってしまう」というのを、みんな分かっているんだと思うんですよね。やっぱりみんな大人ですし、それぞれが責任を持って行動しているからこそ、今の穏やかで成熟した雰囲気があるんだと思います。

島田

「タレントとファンは鏡」という言葉、記憶に残りました！

福原

良かったです！

「声」ってすごく印象に残るものだと思うんです

張

私たちは大学で、アニメ以外にも漫画、小説、映画、ドラマといったものを対象にツーリズムの研究を行っています。一般的には、作品の風景や絵を目で見て、その場所を訪れるというパターンが注目されていますが、最近では視覚以外の感覚にも注目すべきだという動きが研究者の間で広がっています。

その中で、私がアニメツーリズムのもうひとつの特徴だと考えているのが「声」の役割です。例えば、「バルサミコ酢」というセリフを聞くと、それだけで『らき☆すた』を思い出して、「鷲宮の夏」を連想するという方もいらっしゃると思います。私のことです（笑）。このように、声が場所を思い起こさせる役割を果たすことがあるのではないでしょうか。

そこでお伺いしたいのですが、アニメツーリズムにおける「声」の貢献について、福原さんはどのようにお考えでしょうか？　また、「声」を観光やツーリズムにもっと活用するための方法について、もし何かアイデアがあれば教えていただければと思います。

福原

本当に私もそう思っていて、「声」ってすごく印象に残るものだと思うんです。「匂い」もそうですけど、声とか匂いって、大人になってもふと思い出すことありますよね。例えば、青春時代に聞いていた音楽を 30 年ぶりに聞いてゾワゾワっとしたり。香水の匂いを嗅いである人をふっと思い出したり。やっぱりそういう感覚ってすごく記憶に残るんですよね。

だから、「声」をもっと地域と結びつける形で活用してもいいのにな、と私も思ってたんですよ。でも、さっきのイベンターさんの話にもあった通り、専門の業者さんが入っているわけではないので、地域の人たちだけで声と何かを繋げるのってすごく難しいんですよね。

例えば、地域のスーパーで声優がナレーションを担当するとか、地域の電気屋さんの CM の声をやるとか。地域で「鷲宮〇〇ラジオ」みたいなものがあれば、そのパーソナリティを務めるとか。そういう形で聖地と声をもっと密に結びつけていけたらいいのにな、と私も思っています。

ただ、それって私の領域ではなくて、どう進めていったらいいのか分からない部分でもあるんですよね。もし、企業と聖地を繋ぐような会社や団体があれば、もっとスムーズに進められるのかなと思ったりもします。

「地域に声があるっていいな」と思ったのが、昔『WUG（Wake Up, Girls!)』という作品に出演させていただいたときのことなんです。東北が舞台の作品だったんですが、そのご縁で、東北全域のイオンの売り場で流れるナレーションを担当させていただいたことがあって。イオンで私の声が流れて、全然私のことを知らない人でも「私の声を強制的に聞く状況」になっているという（笑)。

もし鷲宮にも「〇〇スーパー」みたいな場所があるなら、つかさの声じゃなくても、私が「今日のお魚、安いですよ〜」とか言ったら面白いんじゃないかな、なんて思います (笑)。

でも、やっぱり地元の商店さんからは見当がつかないんですよね。「どうやってオファーを出せばいいのか」「どこに連絡すればいいのか」「ギャラはいくらぐらいなのか」っていう具体的な部分が分からないと、なかなか動き出せないと思います。そう考えると、やっぱり間にそういう調整をしてくれる会社や団体がないと難しいのかな、って思いますね。

地元の企業やお店と声優がコラボする仕組みができたら、地域全体の盛り上がりにも繋がりそうですよね。

7. まとめ：アニメツーリズムの未来

山村

それでは、今回の研究会の総括に入りたいと思います。これまでの議論を踏まえて、「アニメツーリズムに期待すること」というテーマで、アニメツーリズムの未来、今後のあり方

について、議論を進めていければと思っています。小新井さんから順番にお願いいたします。

主題歌を中心にしたツーリズムの展開も良いですね

小新井

そうですね、アニメツーリズムというと、昔は熱心なアニメファンの文化というイメージが強かったんですが、今ではかなり一般化してきていると感じます。一方で、張さんや福原さんがご指摘されたように、ロケ地や舞台設定など、作品に関する視覚中心の情報だけを重視する形では、盛り上がりが一過性で終わってしまうことも多く、飽和状況になりつつあるという課題も感じています。

そんな中、今日のお話の中で、「声」に着目することで、新しい展開ができるのではないか、という点はとても勉強になりました。さらに、イベントを長く続けるという点においても、全く異なる業界を繋ぐ「間の存在」が不足しているというのは、本当に全国的な課題になり得るなと強く感じました。

「声」に関連して、アニメの主題歌も重要な要素だと思っていて、例えば、張さんにとっての「バルサミコ酢」のフレーズではありませんが、私は『もってけ！セーラーふく』を聞くと、鷲宮の風景がすぐに思い浮かびます。主題歌を中心にしたツーリズムの展開も、まだあまり注目されていない部分ではないかと思うので、そのあたりも今後皆さんと考えていきたいです。

従来のトライアングルモデルに改良の余地があるはずです

張

アニメツーリズムを含めた大衆文化メディアと観光について、私たちは「コンテンツツーリズム」という言葉を用いて研究を進めています。その中で、山村先生が提示された「コンテンツツーリズムのトライアングルモデル」という三つのステークホルダー間の関係性を考えるモデルがあります。このモデルでは、地域社会、ファン、そして製作者、という三者が三角形を形成しているのですが、今日、福原さんのお話を伺って、改めて感じたことがあります。

というのは、このモデルではこれまで、地域と製作者側が基本的にはダイレクトに繋がるという形を想定していたんです。ですが、福原さんがおっしゃっていた、地域と製作者側を繋ぐ「間に入る存在」がいないと、結びつきが難しくなるのではないか、という点は非常に重要なご指摘だと感じました。ということは、従来のトライアングルモデルに改良の余地があるはずです。

今後、山村先生をはじめとする研究者の皆さんと一緒に、この新しい視点を取り入れた改

良モデルを検討することで、より現場の実情に則した、実践的で有用なアプローチが発見できるのではないかと感じました。今日の議論からは、そのような新たな可能性を見出すこともでき、非常に素晴らしい時間でした。

アニメツーリズムの企画・運営側も「楽しむ気持ちを忘れないこと」

島田

私が鷲宮を通じてアニメツーリズムに関わり始めたとき、ぜひこの空気感を埼玉県全体に広げたいなぁと思っていました。アニメを通じて本来は出会うはずのなかった人と人、あるいは人と地域が結びつくことは奇跡のような出来事です。それは地域に新しい活力を与える原動力にもなり得ます。だからこそ、われわれ行政に携わる人間もアニメツーリズムにどう向き合うかをしっかりと意識する必要があります。

と、堅い言い方になってしまいましたが、一番大切なのはファン側だけではなくアニメツーリズムの企画・運営側も「楽しむ気持ちを忘れないこと」ではないかと考えます。福原さんが鷲宮のイベントのことに触れられていましたが、専門のイベンターではない方々が本当に苦心して運営されています。でも、その苦労さえ喜びに変えて取り組まれているように感じます。

ファンの方、地元自治体も含めた地域の皆さん、制作者、さらには福原さんのように地域へ愛情を向けていただける声優の方が、みんなで楽しさを持ち寄って意見やアイデアを出し合えたら、アニメツーリズムは一段と意義深いものになるのではないでしょうか。本日お話を伺いながら、改めて初心に戻ったような気持ちになりました。

直接対話の大切さ

山村

今日は本当にありがとうございました。とても勉強になりました。私から２点、感じたことを申し上げたいと思います。

まず１点目は、地域と製作側を繋ぐ存在、例えばイベンターさんやノウハウのある方々の必要性についてです。それは非常に重要だと私も感じました。一方で、今回特に心に残ったのは、福原さんがフリーランスになられたときに地域の皆さんと直接やり取りをするようになって、福原さんご自身のお考えが変わられたというお話です。そしてそれに伴い、地域の方々の考え方や感じ方も変わったのではないかと思います。それはつまり、「声優さんって架空のキャラクターではなく、身近な、ちゃんとした人間なんだ」「普通に意見交換できるんだ」といった気付きがあったのではないでしょうか。この直接的な交流が、お互いの理解を深める大きなきっかけになったように思います。

このことに関連して、福原さんのお話しを伺いながら思い出したのが、埼玉県ではないのですが、とある自治体で十年以上、毎年開催されているアニメ・マンガイベントです。このイベントでも、毎年声優さんをゲストにお招きして、地元の方々やファンとの交流を行っています。そして、そのイベントの実行委員会さんも、商店街の店主さんなどが中心になっていて、声優さんともダイレクトにやり取りをしているんですね。その結果、ゲストとして来てくださった声優さんの中には、地域の方々と仲良くなって、毎年継続して来てくださる方もいらっしゃるんです。

福原

鷲宮と似てますね。

山村

そうなんです。ですので、今日福原さんのお話しを伺って、やっぱり声優さんやクリエイターさんといった方々と、対面で、直接お互いを知るような交流ができている地域って、お付き合いが長続きするんだなと、あらためて強く感じました。イベンターさんが間に入ると、実はその顔の見える交流が難しくなってしまう部分もあるんですよね。地域から見たらブラックボックスになる。まさに今日、福原さんがご指摘されたところの難しさだと思います。地域が大変な苦労をしながらも対面でやり取りを続けていくか、それともイベンターさんを入れて効率的にシステマチックに運営していくか……もちろんケースバイケースだとは思うのですが、「まちおこしの持続性」という面で、「手作業的直接対話」と「専門家への外注による効率化」の持つ意味をどう整理していくか、今後の大きなテーマにしたいと思います。

もっとクリエイターさん側の声を直接伺える機会を

山村

そして２点目ですが、これは研究の面での話になります。先ほど張さんもおっしゃっていましたが、「コンテンツツーリズム」という研究分野がありまして、近年は若い世代の研究者も増えています。ただ、その多くは、ファン心理やファン行動、地域側の観光まちづくりマネジメントやシティプロモーションの角度から研究している人たちがほとんどなんですね。そうすると、製作側の考え方や視点というのが研究に反映されることが非常に少ないんです。逆に言えば、今回のようにコンテンツツーリズムに関わられているクリエイターさん側の声を直接伺える機会というのは、研究者にとって非常に貴重なんですね。実は、こういった機会はありそうでほとんどない。これって現在のコンテンツツーリズム研究のひとつの、かなり大きな弱点だと、私自身も反省しています。だからこそ、こういった場をまた設

けていただけると、研究もさらに発展していくのではないかと感じました。非常に勉強になる機会をいただき、本当に感謝しています。

「ライブ感」の重要性

板倉

私たちはエンタメ業界では「出演する側」ですが、その中で私の経験上強く感じたのは、「あの人に直接会いたいな」とか、「直接歌声を聴きたい、お芝居を見たい」といった、いわゆる「ライブ感」の重要性なんです。やっぱりそういう「生」での体験がすごく大事だと思っています。その意味では、アニメツーリズムにおける重要なキーワードは「実際に現地で何々ができる」という点になるのかなと思っています。例えば、「そこに行かないと体験できないこと」があるからこそ、ファンはその場所を訪れるんだと思うんです。もちろん、インターネットで情報を見たり、映像を楽しんだりすることも簡単にできますが、ツーリズムの良さはやはり「直接現地に行って楽しむ」という体験そのものにあると思うんですよね。そういった意味では、アニメツーリズムの面白さや良さというのは、「アニメの世界観」と「リアルな現実」が融合するところだと思います。実際に訪れたリアルな場所で、非現実的な世界に入り込む感覚が味わえること。これがアニメツーリズムの魅力だと思います。

また、先ほど皆さんのお話の中でも出ていましたが、やはり「五感」がひとつの重要な要素、キーワードではないかと思います。「見る」、「聞く」といった感覚だけでなく、「食べる」、「触る」といった体験や、実際にその場所で感じる「匂い」など、「五感」は生で体験しないと楽しめないものですよね。「五感」で感じるそれぞれの作品の良さや、場所のオリジナリティがあるからこそ、その体験を通じて、その場所へ「また行きたい」と思わせる力がある。またそこに行きたくなる。この辺がアニメツーリズムの素晴らしいところだと思いました。

ただ、その一方で、課題も少しあると思いますね。特に、いきなりそれをビジネスとして成り立たせようとするのは難しい部分もあると思います。ですので、ビジネスとして成り立たせる前に、やっぱり段階を踏むことが重要なんだろうなと思います。その最初の段階は、ファンの方々や地域の方々に楽しんでもらうこと、そして地域貢献。こうした方向を目指しつつ、その後、時間をかけてビジネス的な取り組みを進めていく。これがひとつの形ではないかと思っています。

そのためには、先ほど皆さんがおっしゃっていたように、地域の方々、行政、制作、そして最も大事なファンの皆さん。こうした方々がしっかりとネットワークを構築していくことが大前提になるのかなと思います。

私たちは、本当にファンやお客さんがいて初めて成り立つものなので、やっぱりそのニーズを知ることが重要だと思います。お客さんがどういったものを求めているのか、どんな期

待をしているのかというところをしっかりと把握していくことが第一歩ですね。特に、イベントやツーリズムに「行く側」（ファン）と「運営する側」（地域や制作側）では感覚の違いもあるので、まずはファンやお客さんの思いを「運営する側」は汲み取って、それを基に進めていくことが重要だと感じています。

私はアニメや声優業界に関わっておりますが、エンターテインメント全体を見たときに、アニメだけでなく、映画やドラマなども含めた「エンタメツーリズム」という形で、町や市、県といった様々なレベルの地域を活性化させる可能性があるのではないかと思っています。あるひとつの町だけで特定のアニメツーリズムを完結させるのは難しくても、近隣の地域と連携して複数の観光要素を組み合わせることで、新たな形のツーリズムが生まれると思います。

エンタメツーリズムのネットワーク構築に向けて

板倉

少し余談になりますが、先週、千葉県の柏市に住んでいる私がロケ地マップを見ていて、いろいろと面白い気づきがありました。実は柏市も最近いろいろな映画やドラマのロケ地として使われることが増えているみたいなんですよね。例えば、先日も地元のショッピングモール内に特別企画展示のようなものがあって、そこにロケ地に関するパンフレットや資料が置いてありました。実際に住んでいる私も、「こんな形で柏市が取り上げられていたんだ」とあらためて知ることができました。こういった取り組みって、ファンや旅行者だけでなく、地元の人に対しても「自分のまちがこういうふうにエンタメで取り上げられて、注目されているんだよ」と伝えるきっかけになるので、すごく大事だなと感じました。

また、これは地元の広報誌『広報かしわ』（2024 年 12 月号）なのですが、その中には『ベルサイユのばら』が描かれたマンホールの蓋が紹介されていました。これも、多くの地域で似た取り組みが行われているかもしれませんが、柏市では市制 70 周年を記念して、同漫画の作者の池田理代子先生がデザインに携わっているんです。池田先生が昔、柏に住んでいたことがきっかけで実現したプロジェクトのようです。

こういうふうに、作品や作者の先生が地域に関わる形って、まだまだたくさん可能性があると思うんですよね。例えば声優さんだったら、出身地やゆかりのある場所をツーリズムのテーマにすることも考えられると思いますし、地域のイメージキャラクターに声を当てるといったことも考えられるかと思います。いずれにしても、これから、いろんな形で地域とエンターテインメントが繋がっていけば、ツーリズムの可能性も広がり、いろいろと面白い展開ができるのではないかな、思いました。

山村

ありがとうございます！　「エンタメツーリズムのネットワーク」構築、本当に重要なキーワードですね。板倉さんがおっしゃる通り、アニメだけでなく、様々なエンタメ、そして近隣の観光資源が連携することで新たなツーリズムのあり方が生まれてくると思います。エンタメをきっかけ、核としつつも、様々な人や資源がつながりあっていく「エンタメツーリズム・ネットワーク」の必要性、可能性を考える非常に良いきっかけをいただきました。ありがとうございました。

それでは、最後に福原さんから全体のまとめや感想を含めてコメントをいただければと思います。よろしくお願いいたします。

是非交流会の定期開催を！

福原

私自身は聖地巡礼やコンテンツツーリズムについて専門的に研究しているわけではないので、今日の皆さんのお話は、とても新鮮で、知らなかったことも多く、勉強になりました。今後、この会がどんな形で発展していくのかは正直、未知数ではありますが、こういった場でいろいろな立場の人間がコミュニケーションを取ることは、とても大切だと感じました。実際に顔を見て言葉を交わすだけで、何かポジティブな気持ちになれたり、物事が前進するきっかけになったりすると思います。私も、この 1 時間で「鷲宮はまだまだ盛り上がれるんじゃないか」という気持ちになることができ、こうした交流会は本当に意義があるなと思いました。ぜひ定期的に開催しませんか？

山村

ぜひよろしくお願いいたします！

張

私は今、広島で働いていますので、広島開催も良いですね。もちろん、私の出身地の韓国でも！

福原

いいですね！　何かの形でぜひやりましょう。今日はありがとうございました！

来年でデビュー20 周年を迎えます

福原

来年でデビュー20 周年という大きな節目を迎えるので、それまで走り抜けたいです！中学生の時に声優になる！と心に決めて、15 歳で親元を離れて単身上京し、がむしゃらに頑張ってきました。厳しい芸能の世界で 20 年も生きられた事は本当に幸せな事ですし、私の財産です。また皆さんとお仕事が出来るように頑張ります……！

私には３歳の息子がいまして、育児と仕事の両立の難しさも身に染みて感じております。声優の世界は産休・育休もありませんし、時短制度やフルリモートなど、現代の便利な制度は一切通用しません。どこまで自分の夢を追いかけるか、自問自答する日々ですが、まだまだ甘えたい盛りの息子の事もありますし、今はマイペースに、今の私に出来る精一杯のところで一生懸命お仕事をさせていただけたらと思っています！

山村

福原さん、板倉さん、今日は貴重なお時間をいただき、本当にありがとうございました！

（第１部おわり）

アニメツーリズムのこれまでとこれから　第 1 部：
声優・福原香織さんに聞く「声のお仕事」が変える観光まちづくり（座談会録）

登壇者：

福原香織（株式会社ブライトイデア・声優）
板倉篤史（株式会社ブライトイデア・チーフマネージャー）
山村高淑（北海道大学・教授）
島田邦弘（埼玉県上里町・副町長）
張慶在　（広島大学・准教授）
小新井涼（アニメコラムニスト）

編者：

山村高淑
板倉篤史

2025 年 3 月 31 日　発行

発行：北海道大学観光学高等研究センター
〒060-0817
北海道札幌市北区北 17 条西 8 丁目
TEL 011-706-5382